

令和4年度 ICT を活用した自立活動の効果的な指導の在り方の調査研究
成果報告書

実施機関名（山口県教育委員会）

1. 問題意識・提案背景

本県では、平成30年12月に策定した「山口県特別支援教育推進計画」により、一人一人に応じた指導・支援の充実や、多様な学びの場の整備・充実など、インクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育推進の取組を進めている。

また、文部科学省委託事業「発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業」のうち、平成28年度から2年間、「通級による指導担当教員等専門性充実事業」を、平成30年度から2年間、「発達障害の可能性のある児童生徒の多様な特性に応じた合理的配慮研究事業」をそれぞれ受託し、市町教育委員会と連携しながら、切れ目ない支援体制の構築に取り組んだ。

委託事業では、通級による指導におけるタブレット端末や音声教材の活用、合理的配慮の提供の観点からの支援機器の活用など、ICTの効果的な活用方法について重点的に研究し、研修会、協議会の開催やリーフレットの作成・配付等により研究成果の普及に努めた。

さらに、「GIGAスクール構想」の実現に向け、本県では、令和2年度中に全県立学校（中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校）児童生徒1人1台タブレット端末の整備及び校内ネットワークの高速化を進めるとともに、端末等を効果的に活用して個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、子供たちの可能性を広げる「やまぐちスマートスクール構想」の推進を重点施策に掲げて取組を進めている。特別支援教育関係では、障害のある児童生徒へのICTの活用の一層の促進のため、障害の状態等に応じた端末のカスタマイズの促進に加え、特別支援学校2校への分身ロボットの導入や視線入力機器の配備、リーダー育成のための研修会の実施等を行っているところである。

こうした中、新型コロナウイルス感染症の影響により、本県においても障害のある児童生徒の教育活動を制限する状況が生じた。とりわけ、特別支援学校や通級による指導における自立活動については、教員と児童生徒、児童生徒同士の距離が近かったり、内容によっては接触したりするなど感染リスクが高く、対面による指導や集団における指導が困難な状況にあった。

このため、令和3年度に本事業を受託し、小学校1校、中学校1校、高等学校1校、特別支援学校3校を指定（小学校、中学校は令和4年度に別の市の小学校、中学校に変更）して、ICTを効果的に活用した、対面による指導と「同時双方型通信システムを活用したWeb会議システム」（以下、「オンライン」）による指導のベストミックスによる自立活動の指導の充実及びオンラインによる支援体制の構築に向けた取組を進めることとした。

本県として、オンラインによる自立活動の指導の実践は初めての試みであり、各指定校ともまだ試行錯誤の段階であるが、1年次の取組を通じて以下の知見を得ることができた。

<オンラインでのやりとりを含めた、児童生徒の実態把握（障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、生活や学習環境など）の在り方>

- ・外部専門家との連携による、より客観的・的確な実態把握を行う上で、リモートワーク

ツール（Microsoft Teams）を活用し、外部専門家と動画や資料を共有しながら手軽に実態把握のためのオンライン会議が行える体制を構築することは有効で、担当教員の満足度も高い。しかしながら、実態把握のすべてをオンラインで行うことは難しく、外部専門家の直接の観察による実態把握とオンラインによる実態把握を組み合わせることがより効果的である。

- ・実態把握のための動画撮影に当たっては、個人情報保護の観点を踏まえつつ、把握したい内容がよりの確に伝わるよう、撮影の範囲や角度等について検討する必要がある。
- ・オンライン上で、プレゼンテーション用ソフトやホワイトボード等を活用し、協議の経過や共通理解事項等を可視化しながら実態把握を進めることは、担当教員の理解度を高める上で有効である。

＜特別支援学校及び特別支援学級における自立活動や、通級による指導について、オンラインによる実施を含めた指導（対面とオンラインを組み合わせた指導）及び評価の在り方＞

- ・特別支援学校における自立活動の指導においては、対面での指導に比べ、オンラインでの指導は集中できる時間や伝えられる情報量が限られる傾向があることから、取り扱う内容や授業構成、情報の伝え方等についての十分な検討が必要である。特に、対象児童生徒の興味・関心を把握した上で、学習意欲が高まる内容を取り扱うことが有効である。
- ・通級による指導においては、特に「人間関係の形成」「コミュニケーション」に関する指導内容について、個別的な指導を対面で、ペアや小集団での指導をオンラインで行うことにより、指導の効果をより高めることができる可能性がある。
- ・リモートワークツールを活用し、指導の記録や動画等を保存、蓄積することにより、より客観的な評価を行いやすくなる。

＜オンラインでのやりとりを含めた、外部の専門家や在籍学級担任（他校含む）等との連携の在り方＞

- ・リモートワークツールを活用し、日常的にメッセージのやり取りをしたり、ファイルの共有をしたり、必要に応じてオンラインを実施したりすることにより、連携を一層強化することができる。
- ・時間的、場所的な制約が少ないオンラインでのやり取りのメリットを生かすことにより、連携の範囲をより広げることができる。

しかしながら、これらの知見はまだ仮説の域に留まっているものもあり、今後、各指定校での実践事例を一層蓄積し、検証を深めていく必要がある。また、これまでの取組内容を「個別の指導計画」等とどのように関連付けていくのかなど、課題も残っている。

そのため、令和4年度は、1年次の取組をさらに充実・発展させ、取組の内容を全県的に普及させるためのモデルプロセスを構築することをめざす。

新型コロナウイルス感染症の影響が長期化しているが、このような状況は逆に、自立活動の意義を再確認したり、通常の学校における自立活動の指導を価値付けたりする上で好機と考えることもできる。コロナ禍における、障害のある児童生徒の学びの保障のためには、「ピンチ」を「チャンス」と捉え、従前の指導に加えて、現在整備を進めている ICT を効果的に活用し、対面による指導とオンラインによる指導のベストミックスを図ることにより、本県の小・中・高等学校及び特別支援学校における自立活動の指導の幅を広げ、内容を一層充実

させたい。

また、本県では、特別支援学校の分教室を2教室設置しているが、在籍数が少人数であることに加え、本校と距離的に離れていることから、これまで集団での学びを十分に確保することに課題があり、本事業においてオンラインによる指導を取り入れた実践を本格的に進めているところである。この部分についても引き続き取り組み、分教室における教育の一層の充実も図りたい。

2. 目的・目標

特別支援学校や小・中・高等学校等の通級による指導での自立活動の指導において、感染症対策や地理的な条件等により、対面による指導や集団における指導が難しい際の学びの保障や、担当教員の専門性の向上等による指導の質の向上、校種間連携や特別支援学校のセンター的機能の活用、外部専門家との連携等による切れ目ない支援体制の構築などの観点から、ICTを活用したオンライン指導及び相談支援の在り方について研究し、その成果を広く普及することにより、特別支援教育の一層の充実に資する。

<小・中学校>

- ・対面による指導とオンラインによる指導を効果的に組み合わせた通級による指導の在り方について研究し、指導事例を蓄積、普及する。
- ・特別支援学校のセンター的機能を活用し、自立活動の指導における実態把握や評価等に係るオンラインでの連携体制を構築する。

<高等学校>

- ・特別支援学校のセンター的機能を活用し、自立活動の指導における実態把握や評価等に係るオンラインでの連携体制を構築する。

<特別支援学校>

- ・感染症対策や地理的な条件により、自立活動の指導や集団における指導が難しい場合においても、ICTを活用したオンラインによる指導が円滑に実施できるよう、オンラインによる指導における効果的な手法について研究するとともに、円滑な指導を実施するための校内体制を構築する。
- ・外部専門家等の参画による、自立活動の指導における実態把握や評価等の在り方について、ICTの活用によるオンラインでの手法を研究し、実践事例を蓄積、普及する。
- ・特別支援学校のセンター的機能として、ICTを活用し、小・中・高等学校等での自立活動の指導における実態把握や評価等に係る支援体制を構築する。

3. 実施体制

(1) 指定校

<小・中学校>

指定校①：A市立B小学校…言語障害、学習障害（令和3年度）

指定校②：A市立C中学校…学習障害（令和3年度）

指定校③：D市立E小学校…情緒障害（令和4年度）

指定校④：D市立F中学校…学習障害（令和4年度）

<高等学校>

指定校⑤：県立G高等学校…難聴、自閉症、情緒障害

<特別支援学校>

指定校⑥：県立H総合支援学校…知的障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱

指定校⑦：県立I総合支援学校…知的障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱

指定校⑧：県立J総合支援学校…知的障害、肢体不自由

(2) 企画（検討）会議

No.	所属・職名	備考
1	徳山大学福祉情報学部 講師	(ICT活用に係る助言)
2	山口大学教育学部 講師	(自立活動に係る助言)
3	山口県発達障害者支援センター センター長	臨床発達心理士
4	やまぐち総合教育支援センター 研究指導主事	
5	特別支援教育センター 地域コーディネーター (※)	
6	視覚・聴覚障害教育センター 地域コーディネーター	
7	A市教育委員会学校教育課 指導主事	
8	A市立B小学校 教諭	指定校代表
9	A市立C中学校 教諭	指定校代表
10	D市教育委員会学校教育課 指導主事	
11	D市立E小学校 教諭	指定校代表
12	D市立F中学校 教諭	指定校代表
13	県立G高等学校 教諭	指定校代表
14	県立H総合支援学校 教諭	指定校代表
15	県立I総合支援学校 教諭	指定校代表
16	県立J総合支援学校 教諭	指定校代表
17	県教育庁特別支援教育推進室 指導主事	事業担当

※地域コーディネーター（本県独自の呼称）

県立特別支援学校の特別支援教育センターや小・中学校の特別支援教育サブセンターに配置される、域内の学校への相談支援を行う専門性の高い教員

第1回…令和3年7月14日（水）14：00～16：00 オンライン開催

○事業概要及び各指定校の取組内容説明

○外部専門委員からの意見聴取及び協議

・事業及び各指定校における取組の方向性

・オンラインによる自立活動の指導における留意点 等

第2回…令和4年2月18日（金）13：00～15：00 オンライン開催

○各指定校の取組内容の報告

○質疑応答及び外部専門委員からの講評 等

第3回…令和4年7月13日（水）14：00～16：00 オンライン開催

- 令和3年度の取組について
- 外部専門委員からの意見聴取及び協議
 - ・事業及び各指定校における取組の方向性

第4回…令和5年2月24日（金）15：00～16：30 オンライン開催

- 文部科学省報告会について
- 各取組校の取組内容の報告
- 質疑応答及び外部専門委員からの講評 等

4. 取組概要・成果

取組に当たっては、受託団体及び各指定校間での情報交換、情報共有体制の構築を目的として、リモートワークツール(Microsoft Teams)を活用してオンライン上のチームを作成し、連携を図りながら以下の取組を進めた。

<各指定校の主な取組> ※令和3年度も含む

○取組概要

- (1) オンラインでのやりとりを含めた、児童生徒の実態把握（障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、生活や学習環境など）の在り方について
 - ①通級による指導を受ける生徒の授業の様子等を撮影した動画を編集してクラウド上に保存し、資料データ等とあわせて外部専門家と共有できる仕組みを構築するとともに、オンラインでの事例検討会を開催【指定校①②】
 - ②肢体不自由のある児童生徒の「身体の動き」の指導に関して、理学療法士（PT）によるオンラインでの実態把握を実施【指定校⑧】
- (2) 特別支援学校及び特別支援学級における自立活動や、通級による指導について、オンラインによる実施を含めた指導（対面とオンラインを組み合わせた指導等）及び評価の在り方について
 - ①通級による指導において、近隣の学校をオンラインでつないで、児童同士がかかわり合いながらのコミュニケーションに関する学習を実施【指定校①③】
 - ②通級による指導において、ICTを媒介としたコミュニケーションに関する学習を実施【指定校④】
 - ③学校と家庭をオンラインでつないで、学級担任による不登校生徒への支援を実施【指定校④⑧】
 - ④分教室に在籍する児童生徒が、「人間関係の形成」「コミュニケーション能力の向上」をねらいとして、本校とのオンラインによる合同授業や合同行事を実施【指定校⑥⑧】
⇒オンラインを活用した体験学習、おもちゃ作り、合同バス遠足
 - ⑤病院に入院している障害の程度が重度の児童生徒を対象に、タブレット型端末や分身ロボットを活用して、「人間関係の形成」「環境の把握」等に関する指導を実施【指定校⑦】
⇒遠隔社会見学、生活単元学習
- (3) オンラインでのやりとりを含めた、外部の専門家や在籍学級担任（他校含む）等との連携の在り方について
 - ・リモートワークツールを活用し、外部専門家からの助言内容を蓄積、保存して関係者間で共有【指定校⑤】

(1) オンラインでのやりとりを含めた、児童生徒の実態把握（障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、生活や学習環境など）の在り方について

- ①通級による指導を受ける生徒の授業の様子等を撮影した動画を編集してクラウド上に保存し、資料データ等とあわせて外部専門家と共有できる仕組みを構築するとともに、オンラインでの事例検討会を開催

【指定校①②の取組】

A市立B小学校及びA市立C中学校においては、通級による指導の対象児童生徒について、指導開始時の様子を動画で撮影してクラウド上に保存し、A市内の小・中学校の相談支援を担当する地域コーディネーターに事前に見てもらった上で、定期的の実態把握及び個別の教育支援計画上の目標設定のためのケース会議をオンラインで実施した。

1 B小学校対象児童の年度当初の実態

- ・5年生で、B小学校において通級による指導を週1時間受けている。
- ・書くことに困難さがあり、通常の学級での授業において板書を視写することが難しい。特に漢字を書くことに苦手意識をもっている。
- ・また、自分の思いを他者に伝えることが苦手であるとともに、同じ学級の児童から言われたことで悩んだり、児童とトラブルになったりすることがある。

2 C中学校対象生徒の年度当初の実態

- ・記憶することの困難さがあり、忘れ物が多い、提出物の期限が守れないなどの様子がみられる。
- ・学習への興味・関心の幅が狭く、興味・関心のないことはほぼ取り組めない。
- ・タイミングや周囲の状況などを踏まえずに、的外れな発言をすることが多い。
- ・自分の思いを通そうとするため、同じ学級の生徒とトラブルになることがある。

3 ケース会議の進め方（B小学校、C中学校共通）

- ①通級による指導開始時の様子を動画に撮影し、クラウド上に動画を保存
→ 個人が特定されないように、対象児童の顔が映らない位置（背後斜め45度あたり）から撮影する。ただし、机上ができるだけ見えるように調整する。

- ②ケース会議の概ね一週間前に、地域コーディネーターに視聴用URL及びミーティングID等を送信

- ③オンラインでのケース会議を実施（令和3年度）

<B小学校>

- ・第1回： 9月10日 実態のより詳細な把握
- ・第2回： 10月15日 個別の教育支援計画の目標の見直し及び支援内容の確認
- ・第3回： 12月 3日 地域コーディネーターがオンラインを活用して通級による指導をリアルタイムで参観

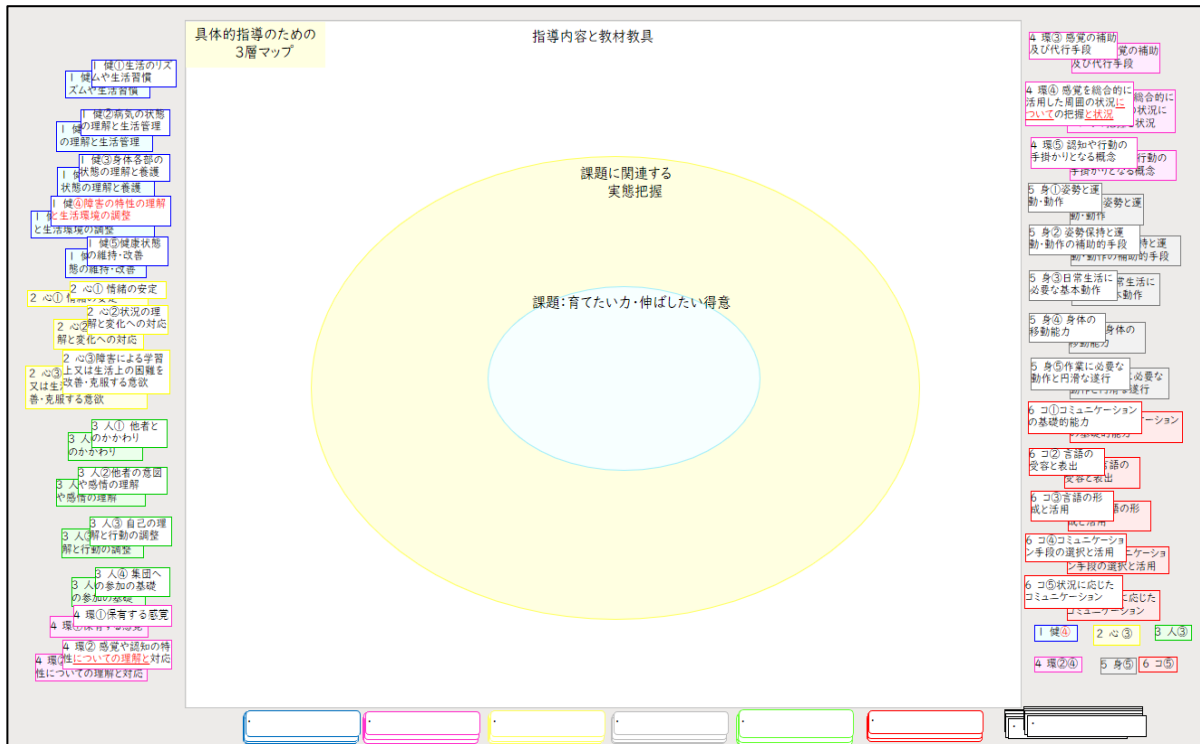
<C中学校>

- ・第1回： 11月30日 実態のより詳細な把握
- ・第2回： 2月 9日 次年度に向けての個別の教育支援計画の目標の見直し及び支援内容の確認

オンラインでのケース会議では、「具体的指導のための3層マップ」を活用した。画面共有で地域コーディネーターが通級による指導担当教員等から聞き取った内容をリアルタイムで入力し、参加者で共有しながら進めていった。

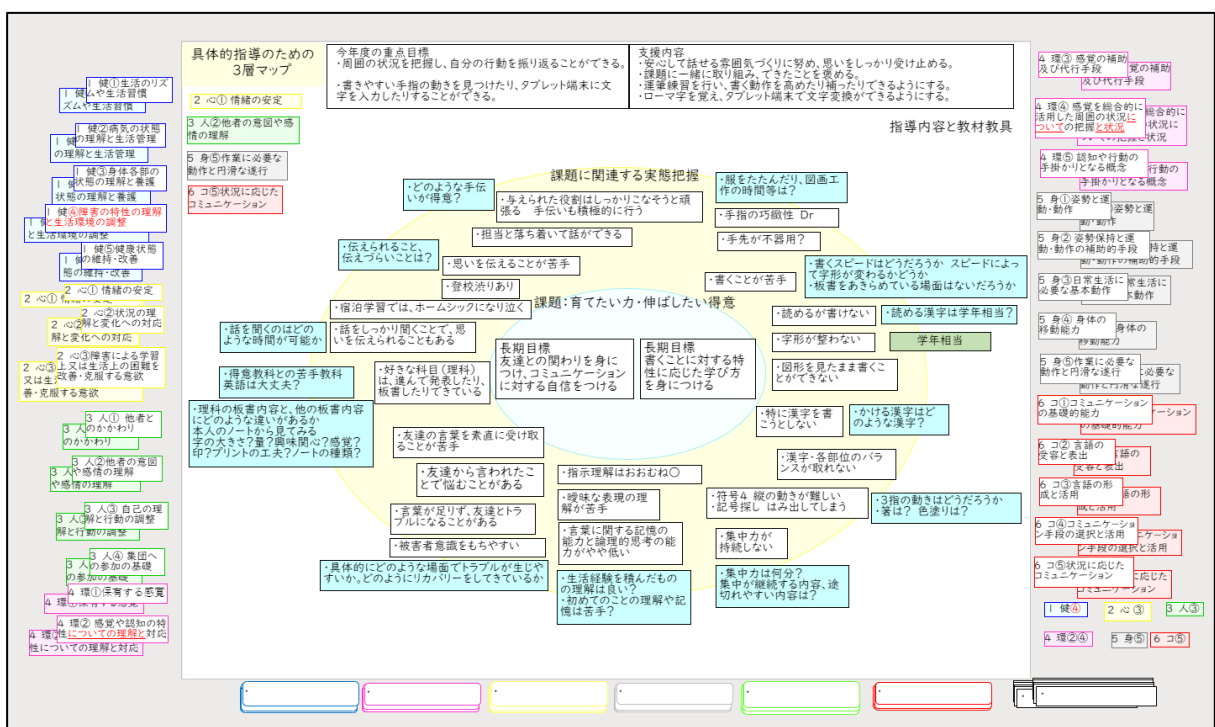
また、地域コーディネーターの気付きや助言等をマップ内に随時追記し、リモートワークツール上で共有するとともに、通常の学級担任等からの情報についても随時記載した。

《具体的指導のための3層マップ》



以下に、B小学校のケース会議を踏まえて追記したマップの内容等を示す。

《第1回ケース会議での実態把握の内容を反映》



《実態把握を踏まえた支援方針の共有》

手の使い方の学習で色塗りについて、魚などの本人の興味関心を活用しながら取り組み、仕上げたもので、ゲームをしたり、展示をしたり、プレゼントしたりして活躍の場を用意する
手の動かし方については引き続き指導する

ひらがな、カタカナ、漢字の書字において、書き始めの線が縦から認識していることが多い
ため、1画目がどの線か、書き始めの線の方向と書き始めの枠内での位置の意識をあげて
いく パーツのパズルやタブレットの活用



くにがまえの書き方や「出」の漢字等に見られるように、線の合成分解に課題が見られ、
パーツを分けて意識できる学習に取り組めるといいのではないかと思います。

点つなぎの学習やコグトレの重なり図形の課題などに取り組んでみてもよいかもしれない



折り紙を折るのはどのぐらいできるか、箱や鶴などを折っているところを見て、形の捉えや手
の動きや手順書の見取りの力について確認する

上記の取組を通して、以下の成果が得られた。

- ・ 事前に撮影した動画や「具体的指導のための3層マップ」を活用したケース会議を実施することにより、必要な情報を可視化して参加者全員で閲覧できるため、対象児童生徒の実態や目標等を確実に共有することができた。
- ・ 上記の内容をクラウド上に時系列で保存し、常に確認できるようにしたことにより、指導の際に常に実態や目標を意識して進めることができた。
- ・ オンラインの活用により、地域コーディネーターがリアルタイムで通級による指導のサポートを行う体制づくりができ、より実効性のある相談支援を実施できた。

一方、今後の課題としては以下の内容が挙げられる。

- ・ 通級による指導（個別的な指導）場面は比較的動画の撮影を行いやすいが、在籍する通常の学級での様子は他の児童生徒も撮影されるため、撮影方法や個人情報等の取扱いに留意が必要である。
- ・ 地域コーディネーターのコーディネート力に左右される部分が大きく、今回実施した方法をより簡便な形に整理し、普及しやすくすることが必要である。

②肢体不自由のある児童生徒の「身体の動き」の指導に関して、理学療法士（PT）によるオンラインでの実態把握を実施

【指定校⑧の取組】

県立J総合支援学校は、本校から約30km離れた場所に分教室を設置している。分教室に在籍する児童生徒は全員知的障害があり、知的障害と肢体不自由を併せ有する児童生徒もいる。そのため、これまで年に1、2回程度理学療法士を招聘し、身体の動き等に関する指導の充実に向けた的確な実態把握のための助言を得ていたが、近年のコロナ禍により、その機会の

設定が難しい状況が続いていた。

そこで、オンラインを活用し、オンラインで指導の様子を見ていただきながら実態把握に係る助言をいただくこととした。

<学校での自立活動の指導>



<病院（理学療法士）>



1 対象生徒の実態

- ・ 中学部生徒 知的障害、肢体不自由
- ・ 学校生活においては常時車椅子を使用している。

2 指導に関連する自立活動の区分

- ・ 健康の保持、心理的な安定、身体の動き

3 自立活動の指導目標

- ・ 自ら身体を動かそうとする意欲を高める。
- ・ 必要に応じて補助的手段を活用しながら、座位の保持能力を高める。
- ・ 車椅子での移動能力を高める。

4 具体的な指導内容（令和3年度）

（第1回：12月6日 第2回：12月23日）

- ・ 座位の保持練習
- ・ 膝、肘の伸展（拘縮への対応）

指導の様子を理学療法士側に配信し、指導終了後に理学療法士から助言を得た。具体的な助言内容は以下のとおりである。

- ・ 左足大腿骨の外側の筋肉が硬くなっているように見える。そのため、左足が外側に引っ張られ、かかどが浮く。
- ・ 背中を反らせることで体を支えている。仰向けになった時に骨盤を軽く押さえ、腰を伸ばすと良いと思われる。
- ・ 座位の際に左側に体重がかかっている時間が長いので、時々姿勢を変える必要がある。このような場合、側弯になりやすいので注意する。側弯予防のための装具を作ってもよいかもかもしれない。

また、理学療法士に、オンラインを活用した実態把握に係る助言に関しての感想を尋ねたところ、以下の回答を得た。

<良い点>

- ・理学療法士の相談支援を必要とする児童生徒は障害の程度が重度であることが多い。コロナ禍の中で相談支援を安全に実施するために、オンライン活用は有効な方法の一つである。
- ・指導の様子や助言の内容等をレコーディングすることができ、内容を後で振り返りのために活用したり、指導記録として蓄積したりすることができる。

<課題>

- ・対象児童生徒に直接触れて感じ取ることができないため、どうしても対面に比べると得られる情報量が限定される。
- ・カメラの角度によっては、見たい部分を見ることができない場合もある。カメラを複数台用意し、様々な角度で見ることができると良い。

(2) 特別支援学校及び特別支援学級における自立活動や、通級による指導について、オンラインによる実施を含めた指導（対面とオンラインを組み合わせた指導等）及び評価の在り方について

- ①通級による指導において、近隣の学校をオンラインでつないで、児童同士がかかわり合いながらのコミュニケーションに関する学習を実施

【指定校①の取組】

A市立B小学校は、複数の障害種を対象とする通級指導教室を設置しており、A市における特別支援教育の中心校としての役割を担っている。

B小学校通級指導教室の児童は言語障害のある児童が多いが、近年は発達障害のある児童の利用も増えている。自校通級とともに、B小学校の教員が市内の他の小学校に出向く巡回指導も実施している。

B小学校では、これまで特に言語障害のある児童の個別指導に重点を置いて取り組んできたが、一方で、通常の学級での適応に向け、個別指導で身に付けた力を小集団の中で発揮できるようにするための学習機会の設定の必要性を感じていた。

そこで、B小学校の通級指導教室と、A市内のK小学校の通級指導教室（B小学校の教員が巡回指導を実施している教室）をオンラインでつなぎ、吃音のある児童（B小学校1名：Aさん、K小学校1名：Bさん）を対象にペアでの学習を複数回実施した。



取組の様子（令和3年度）
<第1回：10月12日>
①自己紹介 お互い譲り合っていたが、Bさんから自己紹介を始めた。自分のタブレット型端末で

撮影してきた画像（好きなアニメのキャラクターなど）を見せながら紹介していた。Aさんが自己紹介している間は、うなずいたり優しく声をかけたりしていた。

Aさんは、最初は緊張していて表情も硬く、あまり話さなかったが、Bさんの話はよく聞いていた。自己紹介の場面では、まずBさんの話を聞いてから自分の番になったことで、少しずつではあるが話すことができた。一番話したかったこと（好きな芸能人）は詳しく話すことができ、Bさんも興味をもったことで笑顔が見られた。

②ゲーム「あいこじゃんけん」

最初は担当教員が開始の合図をとっていたが、徐々に児童同士で合図をとるようになった。担当教員も含め、なかなか4人全員があいこにならなかったが、あいこになって揃ったことの喜びを共有し合うことができた。オンラインでややタイムラグはあったが有効な学習活動であった。

【担当教員の振り返り】

初めての試みであったことから、両児童とも最初は緊張していたが、個別指導時と比べると多く話せていた。担当教員が話す割合が多くなってしまったため、児童同士が話せる時間をしっかり確保することが重要である。

<第2回：10月26日>

①「ゆっくりしりとり」

ゆっくりとしたテンポを心がけることをねらいとした学習である。それぞれマスコットをタッチしながら、担当教員も加わって行った。

Bさんはゆっくりとしたテンポを心がけていた。「し」の言葉で一旦止まり、困っていたため、担当教員が指差しで援助し、「しっぽ」と言えた。

Aさんは最初早口になってしまったが、Bさんのしりとりの様子を見ながら、本来の目的である「ゆっくり話す」ことを意識し、修正できた。

②「学校を紹介しよう」

Bさんから学校紹介を始めた。あらかじめ準備していた原稿をもとに紹介したが、時々話に詰まる場面も見られた。好きな先生や面白い先生について、画面共有を使いながら紹介した。

Aさんは時々うなずきながらBさんの話を聞いていた。また、学校の中の好きな場所や好きな先生について話す場面では、タブレット型端末を自分で操作して画面共有で画像を見せ、思いを伝えることができた。面白い先生の動画を見せてBさんに笑ってもらえたことがうれしい様子だった。

【担当教員の振り返り】

授業後の振り返りシートの記入内容から、Bさんは聞く側に重点を置いて、話の途中で割り込まずに最後まで聞いて話すよう心がけていたことが分かった。

Aさんは、前回に続き、今回も「話すことは楽しい」と感じ取れた様子であった。最初はオンラインでの学習に消極的だったが、「先生、やってよかった」という発言があった。

会話の楽しさを感じ取れる学習活動を今後も設定していきたい。

<第3回：11月16日>

①「おたがいにインタビューをしよう」

AさんはBさんに、修学旅行のことについてインタビューした。あらかじめ考えてい

た質問を言ったが、ここで吃音が出やすかった。「言わないといけない」という思いが強いと出やすいようである。

その後のフリートークは積極的に話していた。前回よりもさらに打ち解けた様子だった。

BさんはAさんに、社会見学のことについてインタビューした。インタビューはあらかじめ準備していたこともあり、スムーズに行えた。

Aさんからのインタビューに対しては、ゆっくり、相手が聞き取りやすいように話したり、笑顔でうなずきながら応答したりすることができた。

【担当教員の振り返り】

回を重ねるごとにやりとりの量が増えてきている。しかし、オンラインでは、相手の細かい表情や心情が読み取れない難しさやタイムラグなどもあって、お互いに遠慮が生じているようにも感じられる。よりフランクに話せる雰囲気づくりが必要だと感じた。

<第4回（最終回）：11月30日>

①「吃音について～こんな風にして克服しているよ～」

まずBさんがAさんに自分の克服法を話した。

1. 最初の文字をあえて曖昧にする。

「おはよう」を言う時、「お」が出づらいので「はよう」と言う、など

2. 自分がどのような時に吃音になりやすいかを知っておく。

寝不足の時、人が多い環境など

3. 一人で話すのが不安な時は他の人と一緒に話す。

AさんはBさんの話をうなずきながら聞いていた。振り返りシートには「Aさんの方法を素敵だと思いました。でも、私はとりあえず、ゆっくりあわてずにやろうと思います。たまにはAさんの方法でやってみようかなと思いました。オンライン（の学習）をしてとても楽しかったです。」と書かれていた。

【担当教員の振り返り】

普段なかなか人に言えない吃音の悩みについて、同じ吃音のある相手に聞いてもらったり、相手の思いや対応のコツを聞いたりすることで、互いが共感し、心強く感じることもできたことはとても意義があったと感じた。

【指定校③の取組】

D市立E小学校と近隣のD市立L小学校の通級指導教室をオンラインでつなぎ、直接会ったことのない児童同士でのやり取りの中でコミュニケーション能力の向上を図った。



<児童の実態>

C児（E小学校）：コミュニケーションが一方的になりやすい。興味・関心の高いことに対しては、意欲的に話をするができる。自信がないことに対して消極的になり、気持ちが落ち込むことがある。

D児（L小学校）：語彙が少なく、会話が一方的になりやすい。不安が強く、大人に確認をし、安心してからでないと話せないことがある。勝敗にこだわったり、指摘を受けると落ち込み、気持ちの切り替えが難しかったりするところがある。

取組の様子（7月～12月 計12回） ※令和4年度

回数	日付	活動内容	様子
1	6/24	①自己紹介 ②好きなものを伝えよう	<ul style="list-style-type: none"> ・初回だったため、会話が弾むことはなく、担当者が仲介に入る形となった。 ・お互いに自分の好きなものを少し伝えあうことはできた。 ・C児は「次を楽しみにしている」と感想に書くことができた。
2	7/8	①うちわの紹介をしよう ②じゃんけん	<ul style="list-style-type: none"> ・C児は自分から質問をしたり、気付きを言ったりと、話そうとする意欲が前回より高まっていた。
3	9/9	①夏休みの思い出を伝えよう	<ul style="list-style-type: none"> ・二人とも乳歯が抜けているので、しっかりと口を動かさないと言葉が伝わりづらいことに気づいた。 ・お互いに、相手を意識して会話をしたり、質問をしたりしようとする様子が見られた。 ・C児は、うなずきながら相手の話を聞く頻度が上がった。
4	9/27	①クイズ大会 C児からの出題 ②じゃんけん 	<ul style="list-style-type: none"> ・C児がクイズ出題の練習をする際には、早口になりがちだった。そのことを伝えると、本番では、相手を意識したスピードで話すことができた。 ・じゃんけんは、Zoomの関係上、タイムラグが生じ、勝敗に影響することがわかった。 ・C児は、「とても楽しかった。またやりたい。」と感想に書いていた。
5	10/7	① フリートーク (10分間程度) 相手に好きな物を聞こう	※詳細は後述
6	10/14	①クイズ大会 D児からの出題 ②じゃんけん	<ul style="list-style-type: none"> ・じゃんけんのタイムラグを解消するために、じゃんけん棒をつくり、使うようにした。児童双方が勝敗に納得できるようになった。
7	11/4	①クイズ大会 C児からの出題 ②フリートーク (3分程度)	<p>※詳細は後述</p> <ul style="list-style-type: none"> ・E小学校では、テレビに接続するようにしたため、相手の声が聞き取りやすい環境になった。
8	11/11	①ヒヤシンスの観察記録を 発表しよう ②じゃんけん	<ul style="list-style-type: none"> ・お互いに、書いてある観察記録の発表をすることはできた。 ・相手に質問をしてみようと促したが、どんなことを言えばいいのかわからず、担当者が主導することとなった。

9	11/18	①絵合わせ ②じゃんけん 	<ul style="list-style-type: none"> ・両児童が好きなキャラクターを題材にしたところ、意欲的に取り組む様子が見られた。 ・C児は、D児がカードを当てたときに、自然と拍手をすることができた。 ・D児は気持ちが態度に出やすい。自分が取りたいカードを相手が取ったときや、負けそうになったとき、機嫌が悪くなっていることが表情や態度によく出ていた。 <担当者の振り返り> <ul style="list-style-type: none"> ・個々の児童の課題が顕在化した。同学年同士の関わりの中だからこそ見えてくる課題が多く見つかった。今後の指導に生かしていきたい。
10	11/25	①ビンゴゲーム ②じゃんけん	<ul style="list-style-type: none"> ・C児は、最後のじゃんけんで連続して負けたとき、涙を浮かべる様子が見られた。しかし、「あくびがでた」と自分の中で気持ちを切り替えることができた。 ・C児保護者より、「いつもオンラインを楽しみにしている。勝敗の結果ではなく、過程を楽しむことができるようになってきた。」と聞いた。
11	12/2	①何をするか相談 ②ビンゴゲーム（2回目） ③じゃんけん 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分がやりたいこと（絵合わせかビンゴゲーム）を相手に伝える活動を取り入れた。C児は自分なりの理由をつけて伝えることができた。D児が理由を述べなかったため「詳しく言ってほしい」と自分の気持ちを伝えることができた。 ・お互いにやりたいことが異なったため、どう決めるかは児童同士が相談して決めることができた。鉛筆の長さを測ることになり、担当者が手伝いながら定規で測った。お互いに結果について納得し、C児がやりたいビンゴゲームをすることとなった。 <担当者の振り返り> <ul style="list-style-type: none"> ・やりたいことが異なったとき、自分たちで解決しようと相談を始めた。担当者が声をかけすぎないように児童主体となるような支援を心掛けた。
12	12/9	①絵合わせ（2回目） ②じゃんけん	<ul style="list-style-type: none"> ・C児に前回できなかった絵合わせを提案したところ「僕もそう思っていた。Dくんし

			<p>たかったよね。」と相手を意識した発言を聞くことができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・C児は、相手がカードを取ることができたとき、自然と拍手をしている。その行動を賞賛してきたところ、D児も同じように拍手をしたり、勝敗を受け入れようとしたりする姿が見られるようになった。
--	--	--	--

※フリートークの様子のみを抜粋

10月7日 10分間の時間を設定

	C児（E小学校）	D児（L小学校）
発言時の動作	<ul style="list-style-type: none"> ・11回（手の動き4・耳を画面に近づける2・うなずき、首振り、指差し、首の傾け各1） 	<ul style="list-style-type: none"> ・リアクションなし ・不安時に担当者を見る
聞いている時の様子	<ul style="list-style-type: none"> ・うなずき5回 	<ul style="list-style-type: none"> ・上、横、担当者を見る。 ・画面に対しての動作はない。
質問回数	<ul style="list-style-type: none"> ・10回 ・何？と聞き返すのが主 	<ul style="list-style-type: none"> ・32回
相手の返事に対して返事をする、会話を続ける。	<ul style="list-style-type: none"> ・6回 	<ul style="list-style-type: none"> ・3回

- ・D児は自分が聞きたいことを、質問することができた。しかし、話の内容はあちこちに跳び、とまりはなかった。
- ・C児は、質問に答えることが多く、自分から質問することはなかった。
- ・お互いに、自分が興味関心のある話題には口数も増えていた。

<担当者の振り返り>

- ・自然な会話、スムーズな言葉のキャッチボールにつながるような支援、指導を行ってきたい。
- ・どうしても、実際に目の前にいる担当者の方を見てしまう。担当者の立ち位置や声を発するタイミングに配慮し、児童同士の会話が成立するようにしていきたい。

11月4日 3分間の時間を設定

	C児（E小学校）	D児（L小学校）
発言時の動作	<ul style="list-style-type: none"> ・画面を見て（相手を意識して）話をすることができた 	<ul style="list-style-type: none"> ・笑顔で話せた ・早口になりがちだった
聞いている時の様子	<ul style="list-style-type: none"> ・うなずきながら聞く ・首をかしげたり、振ったりする ・聞き取りづらかった時は、相手に確認することができた。(1回) 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の発言を担当者に確認することが多かった ・画面から目線がそれることが減った

質問回数	・ 1 回	・ 6 回
相手の返事に対して返事をする、会話を続ける。	・ 4 回	・ 5 回

- ・ E小学校では、パソコンをテレビにつなぐことにより、聞き取りやすい環境を整えて実施している。
- ・ Zoomの特性上、テレビにつないでいたとしても聞き取りづらい時もある。しかし、「もう一回言ってください。」と自分から聞き返すことができるようになった。

<担当者の振り返り>

- ・ 自分たちの主張はするが、相手を意識した質問や言葉のキャッチボールには至っていない。
- ・ 前回の10分に対し、今回は3分だったにも関わらず、会話の回数は前回と同数程度あった。

<成果と課題>

《成果》

- ・ コロナ禍でグループ指導が難しい中、同学年同士の関わりを持つことができ、コミュニケーションスキルの向上につながっていると考えられる。
- ・ マスクを身に着けずに話をするができるため、相手の表情を意識したやりとりの練習を行うことができた。
- ・ 普段一緒に過ごす関係ではないため、相手の性格や背景を知った上でのやりとりは難しい。自立活動区分「心理的な安定」に関連するが、自分で気持ちをコントロールしながら、他者との関わりを楽しむことができるようになりつつある。

《課題》

- ・ 年度初めの段階で、児童の主訴等を基に、どの児童をペアにするか検討、保護者の承諾、指導時間をあわせるなどの準備が必要である。授業時間を使うため、年度の途中から行うことは難しい。
- ・ 活動内容を検討し、担当者同士の打ち合わせをしっかりと行うことの必要性を感じた。対面で行うよりも活動自体に時間がかかる。オンラインだからこそその指導計画を立てておく必要がある。
- ・ 今年度はペアでの活動を行った。3人以上で行うことを想定した場合の環境設定・担当者の配置・細かな指導計画の立案など、準備段階で難しさがあると感じている。オンラインでのグループ活動を機能させるためには、担当者の技能向上に向けた研修等の必要性を感じた。

<指導助言、相談支援について>

- ・ 担当者が気づかない視点での指導助言を受けることにより、指導・支援の方向性、評価の方法を考えることができた。
- ・ オンライン指導を受けるまでの技能（動画をアップする、準備に時間を要する）が担当教員に身に付いていなかった。事前に研修があるとより効果的だと感じた。

②通級による指導において、ICTを媒介としたコミュニケーションに関する学習を実施

【指定校④の取組】

D市立F中学校において、通級による指導を受けている生徒のコミュニケーション能力の向上を図るため、障害の特性に応じたICT活用の取組を実施した。

<生徒の実態>

- ・中学2年男子（中学1年より通級指導を開始）で担当者との関わりは2年目となる。ストレスを内面にため込んでしまいがちなところがある生徒である。
- ・自分の気持ちや思いを言葉で表現することが苦手で、何をするにも自信がない様子が見えがえる。自分から積極的に話すことはほとんどない。教員からの問いかけには、うなずきで意思表示をしている。他の教員をカードゲーム等のお楽しみに誘うことはできる。
- ・不登校傾向が見られる。通級指導教室には登校することができている。

<取組内容>

- ・ICT（パソコン、タブレット）を利用し、「語彙を増やす」「世の中のできごとに興味をもつ」「本人の興味の幅を広げる」ことを目標としコミュニケーション能力の向上を目指した。インターネットを利用し、担当者が生徒の興味関心のある事柄に触れ、共通の話題で会話を進めて担当者とのやり取りを深めるようにした。
- ・パソコンのキーボード入力（ローマ字入力）で文章を作成する練習を行った。
- ・タブレット学習やパソコンの学習ソフト、タイピングソフトを利用し、本人が自分のペースで学習を進め、集中して取り組む時間を確保した。

<成果と課題>

《成果》

- ・パソコンやタブレットを用いて「ネットニュースを調べる」、「在籍校のホームページの閲覧」、「生徒が興味をもっている事柄について調べる」こと等は、インターネットを用いて必要な情報を短時間で得ることができるため、会話を始めるきっかけにしやすい。
- ・ICTを使っていない中学1年生の時に比べると、ICTを介してやり取りを続ける方が、生徒との会話時間が増加している。生徒の興味のあることをWebサイトで検索し、生徒と共通の話題で会話を続けたり、今世の中で起こっている出来事について生徒が関心をもったりすることができた。
- ・パソコンのキーボードを使うことでローマ字入力の動作がスムーズに行えるようになってきた。キーボードでの入力を行うことで、字を書くことのストレスが減少し、「書字は苦手でも、パソコンで文章を打つことができる」という自信につながった。
- ・ICTを用いて自分で行う課題（タブレットドリル、タイピング練習等）は、時間を決めて取り組んだ。正誤がすぐにわかり問題量が適量であるので、生徒が集中を持続させて取り組むことができている。学習の記録が残ることで生徒が課題を最後までやりきったという達成感を味わうことができた。

《課題》

- ・生徒が自分の思いを言葉で表現できるようになるためには、会話を楽しみたい、話した

いという意欲を高める必要がある。

- ・生徒がコミュニケーションに関してどんな場面で困っているかの実態を把握し、指導につなげていく必要がある。
- ・教員との個別的な場面だけでなく、可能であればペア活動や小集団の活動の中で相手とのやり取りの経験を重ね、ゲームなどの活動を通して、楽しみながらコミュニケーションスキルを伸ばす場を設定していくことが重要である。

<指導助言、相談支援について>

- ・とっさに言葉が出にくい、なんと言えよかわからない場合にはよく使う言葉のパターンを身に付けておき、パターンを増やしていく。言葉のスキルやレパートリーを増やしていく。困ったときに思い出して使い、自分のものにしていくとよい。
- ・Yes・Noで答える質問から5W1Hの質問を入れてみる。
- ・生徒が話したくなる題材を準備する、生徒が興味のある事柄をインターネットで調べてみる、教員が教えてもらう立場になるのも生徒の話したい意欲を高める。

③学校と家庭をオンラインでつないで、学級担任による不登校生徒への支援を実施

【指定校④の取組】

D市立F中学校において、不登校生徒への支援をオンラインで行った。顔を出さなくて良いといったオンラインのメリットを生かし、生徒が安心してコミュニケーションをとることができるよう配慮した。タブレット端末を「外とのつながりのツール」にすることができるのではと考え取り組んだ。

<取組内容>

- ・学校と家庭間をZoomでつなげ、生徒とやり取りを行った。
 - これがきっかけとなり、以前と比べて担任とコミュニケーションがスムーズにとれるようになった。
- ・顔が画面上に登場しないように、Zoomの中で、アバターを使った自由対話を行った。
 - 担任に生徒自ら携帯番号を伝える等、人間関係の距離が縮まってきた。
- ・本人の体調を考慮し、保護者とタイミングを合わせて行った。

<成果と課題>

《成果》

- ・ポケットWi-Fiを使用して、学校と家庭間がZoomでつながったことは、目的を達成することに大きく近づけた。
- ・Zoomの中で、アバターを使った自由対話を行ったことで、本人が顔出しをせずにコミュニケーションをとることができた。このことは、対人面における不安の軽減につながった。
- ・保護者の話によると、生徒自身がZoomに興味をもち、他者とのやりとりを楽しむ経験になったようである。

《課題》

- ・現在、タブレット端末の自宅への持ち帰りを常時行っていないため、Zoomを実施できる

機会が制限される。また、本人の体調により、家庭訪問時に実施できるとは限らない。本人が不在だったということもある。

→ 来年度の持ち帰り実施に向け、柔軟な取組について検討を行う。

- ・ Zoom を行う際は、家庭訪問時に保護者同席で行っている。保護者の勤務の関係で、Zoom 実施のための時間調整が必要となる。
- ・ 本人の体調や保護者との都合の良い時にしか実施できないため、実施できた日から次の日までブランクが空いてしまう。継続した関わりをもつために、保護者と連携していくことが必要である。

<指導助言、相談支援について>

- ・ すぐに登校できるものではないため、長期的な見通しが必要になる。担任と話ができている関係を継続していることが大切である。欲張らず、次につながるように、少し物足りなさを感じる関わり方をすると良い。
- ・ 例えば時間や人、場所など本人が少し頑張れそうなことに慣らしていけるようにする。同じ状況を続けていても本人にとって不安なままであるため、状況を変えていく必要がある。
- ・ 学校と本人のつながりを保護者へ分かりやすく伝え、コンタクトをとり続けていってほしい。
- ・ 保護者は、見通しがないと不安になるため、今後も見通しをもたせる言葉かけが重要である。

【指定校⑧の取組】

県立 J 総合支援学校高等部 2 年に在籍している不登校生徒に対して、人間関係の形成能力やコミュニケーション能力を ICT を活用したオンラインによる授業を通して育成し、生徒が安心して登校し、学校生活を送ることができることを目指して取組を行った。

<生徒の実態>

- ・ 学年が上がりクラス教員の大幅な変更により、環境に慣れることに時間がかかると思われた。
- ・ クラス全体の雰囲気の変化と人間関係構築の困難さから欠席が増え登校できなくなったと考えられる。

<取組内容>

○体育

- ・ 体操やダンス等、体の動かし方を言葉だけでなく、カメラを用いた通信により教員の動きをリアルタイムで実際の動きを視覚的に捉えることができた。その結果、他の生徒と一緒に活動することができた。
- ・ 登校した際にスムーズに参加できるように、グラウンドゴルフやポートボール等の活動の様子を事前に見ることでルールなどの確認ができた。

○数学

- ・ カードを用いた数字合わせのゲーム形式の授業で、教員がタブレット型端末のカメラを

使って本人にカードを選ばせた。教員がカードを指さしながらタブレット型端末を動かし、取りたいカードのところで合図を受け、そのカードかどうか確認してカードを取るという支援を行った。教室内の生徒と一緒に活発に取り組み、「次は」などと言って積極的に参加する姿が見られた。

- ・プリント配付ができなかった授業でも大型提示装置に映したプリント問題をタブレット型端末を通して見ることができ、他の生徒と同じように問題を解くことができた。

○特別活動等

- ・学習発表会ではタブレット型端末上で出演し、同学年の生徒と一緒にステージ上で元気な表情を高等部全体に見せることができた。
- ・SNSを使用した適切な言葉の遣い方を考える授業にオンラインで参加し、他の生徒の意見を聞いて自分の考えを発表することができた。

<対象生徒の支援状況>

○令和4年4月から7月の欠席状況

- 4月 欠席2 (授業日数15)
- 5月 欠席7 (授業日数19)
- 6月 欠席7 (授業日数22)
- 7月 欠席12 (授業日数13) ※登校した1日はSCのカウンセリングのため

○令和4年8月以降の状況

- ・校内コーディネーターは本人から「クラスに入らず、授業以外は別室で過ごすことができれば登校できる」と聞いた。
- ・本人の体調を配慮し、別室登校を含めて学校への復帰を促そうと考え、少しでも学校の様子が分かるように授業や学校行事にオンライン参加(別紙資料5)も行っていくことを提案した。
- ・ICTを活用したオンライン授業に参加したことにより、登校に対するストレスが軽減し、授業や学校行事への参加頻度が増えた。その結果、クラスメートや教員とコミュニケーション回数や時間も増えていき、積極的に授業やホームルームでの話し合いの場に参加できるようになった。
- ・オンラインだけでは家から出ることがなく登校することが難しくなるのではと心配していた(母親)から、定期的に担任と対面で会う状況をつくった。
- ・オンライン以外に校外での学習活動の支援を5回行った。

<成果と課題>

《成果》

- ・画面越しに同学年の生徒と会話できることで帰属感をもち続けることができている、JRを利用して登校しようと考えている。
- ・学習の遅れを防ぐための学習機会の保障としての役割を果たしている。
- ・タブレット型端末上ではあるが、学校行事への参加の頻度が高くなった。

《課題》

- ・授業に参加できているが双方向になっていないことがある。また、教材配付が家庭訪問

等によるので、負担が大きい。

- ・敷地内に登校できた際でも教室には入れず別室でのオンラインでの参加にとどまっている。
- ・現在は毎時間継続して参加するわけではないので学習の積み上げができにくい。
- ・手本として見せる場合はオンライン授業でも有効であるが、一緒にゲーム等活動を楽しむ時はタブレット型端末を持って動かす人との連携が必要である。
- ・選択する授業が本人の興味に依存するので、信頼関係ができていない教員が会話しながらタブレット型端末を操作する必要がある。

<今後の対応>

以下のことを継続し登校に対する不安を軽減、解消して登校につなげていく。

- ・多くの学習機会を保障をするため、オンライン授業の教科を増やしていく。
- ・他の生徒との人間関係を再構築するためオンライン授業によりクラスメートとの対話的で協働的な活動を増やしていく。
- ・教員との対面を通して生徒の気持ちの変化や様子を確認する。

④分教室に在籍する児童生徒が、「人間関係の形成」「コミュニケーション能力の向上」をねらいとして、本校とのオンラインによる合同授業や合同行事を実施

【指定校⑥⑧の取組】

県立H総合支援学校及び県立J総合支援学校は、それぞれ本校とは離れた場所に分教室（小学部・中学部）を設置している。分教室は本校に比べて在籍児童生徒数が少なく、学習集団の規模が小さいため、人間関係の広がり面で課題がある。

そのため、本事業において、本校と分教室間をオンラインでつなぎ、分教室に在籍する児童生徒の「人間関係の形成」「コミュニケーション能力の向上」を目的とした取組を行った。

1 オンラインを活用した体験学習の実践（県立H総合支援学校中学部）

- (1) 山口県独自の体験学習法である AFPY (Adventure Friendship Program in Yamaguchi) のアクティビティの中でオンラインを活用して行えるものを選定する。
- (2) 本校、分教室の生徒を対象に、対面で行うアクティビティ、オンラインで行うアクティビティのそれぞれを行った。

○『Jamboard』の選定理由やメリットについて

- ・クラウドベースなので共同編集ができる。（仮想空間に集合し一体感が持てる。）
- ・手書きや描画ツール、付箋等を簡単に使用できる。（知的障害の児童生徒も容易に操作できる。）
- ・アプリの導入が容易でマルチデバイスに対応している。（準備や管理が容易である。）

○『Jamboard』を使用したアクティビティの内容と実践について

アクティビティ名「したことある人？」

活動内容について

「〇〇が好きな人？」等のお題に対して、グループを作ったり、席や場所を変わったりするアクティビティ

活動のねらいについて

お互いのことを知り合う。 心や体をほぐす。

ICTの活用の工夫及び実践のポイント

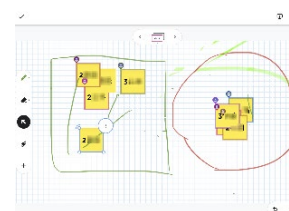
事前に付箋に名前を入力しておき、付箋の移動や色の変更を主にできるようにした。さらに、自由に操作できる時間を設定し、シート上での同時編集やリアルタイムの動きを楽しめるようにした。

活動の様子

付箋が動くことや色が変換ること、そして、同じ空間に集合できることに非常に高い興味関心を示し、意欲的に活動していた。操作方法の個別指導もほとんど必要なかった。



繋がりを喜ぶ分教室生徒



色を変えて付箋を移動

アクティビティ名「ラインナップ」

活動内容について

会話無し、ジェスチャー無し等の条件に沿って、お題の順番通りに並ぶアクティビティ

活動のねらいについて

言語以外の意思疎通について考える。 課題解決に向けてアイデアを出し合う。

ICTの活用の工夫及び実践のポイント

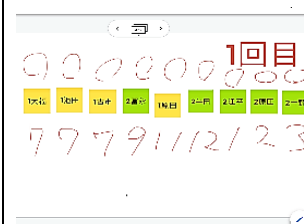
『Zoom』のブレイクアウトルームを使用し対面で行った。伝達時はミュートため、思わずしゃべっても聞こえないというメリットがあった。『Jamboard』は2クラスずつのシートを準備した。

活動の様子

正解がわかった複数の生徒が積極的に付箋を動かし、並び替えにかなり苦戦する様子が見られた。クラスで話し合う時間を設定し、「付箋は一人で」という意見が出て以降スムーズに進行した。その他、教室で伝え方のアドバイスをしていたクラスもあり、リアル、オンラインとも積極的にコミュニケーションを図っていた。



伝達の様子



見事完成！

アクティビティ名「背中でお絵かき+リレー習字」

活動内容について

1人の生徒が『Zoom』で特徴を伝え、背中合わせで絵の特徴を伝えあい、同じ絵を描き上げるアクティビティ

活動のねらいについて

コミュニケーションの取り方について考える。 思いやりや責任感について考える。

ICTの活用の工夫及び実践のポイント

共同編集が可能であるので、自席で描くことが可能である。さらに、1シートに3つのグループが描くようにしたため、自分たちのグループたちだけでなく他のグループの様子を見て楽しむこともできるようにした。

活動の様子

リレーしていく中で、自分の意図しない筆記になる場面もあったと思われるが、批判的な発言をする生徒は全く見られなかった。



特徴を伝える様子



完成した作品

アクティビティ名「バドワイザー」

活動内容について

ファシリテーターから聞いた1人1文字ずつの文字を並び替えてキーワードを見つけるアクティビティ。

活動のねらいについて

周りの動きに注意する。 人と合わせることについて考える。

ICTの活用の工夫及び実践のポイント

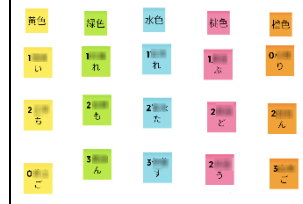
事前に個人の名前の付箋に文字を入力し、色別にグループを作って行った。『Zoom』はカメラ off、ミュートで『Jamboard』上のみで文字の並び替えをするようにした。

活動の様子

事後の振り返りで、わかっていただけ触らなかったという生徒もいた。全グループ予想以上の速さで完成した。「パイナップル」など6文字も行ったが問題なくクリアすることができた。



活動中の様子



すべて完成!

○対面で実施したアクティビティの内容と実践について



アクティビティ名「ラインナップ」

活動内容について


会話なし、ジェスチャー無し等の条件に沿って、お題の順番通りに並ぶアクティビティ

活動のねらいについて

言語以外の意思疎通について考える。 コミュニケーションの取り方について考える。

<p>活動の様子</p> <p>受け身の生徒が多く見られた。人間関係も影響しており、中学部から入学してきた生徒の中には、馴染めない様子も見られた。</p>	 <p>伝達の様子</p>	 <p>指揮をする様子</p>
<p>アクティビティ名「ワープスピード」</p>		
<p>活動内容について</p> <p>目標タイム（15分）を設定し、円になり、全員が球をキャッチできるかを行うアクティビティ ※ルール「隣の人にパスはできない。」「1回ボールに触った人は、もうボールに触ることはできない。」</p>		
<p>活動のねらいについて</p> <p><input type="checkbox"/> アイデアを出し合う。 <input type="checkbox"/> 合意形成の仕方について考える。 <input type="checkbox"/> トライ＆エラーを繰り返し、目標を達成する。</p>		
<p>活動の様子</p> <p>チャレンジする中で「触った人は座って」という言葉があった。しかし、早く触りたいという思いが強い生徒が多く、終盤に長い距離が残しまい時間内に達成できなかった。話し合いの時間を設定すると、「名前を読んでパス」「近いところから確実に」など意見が出た。</p>	 <p>活動中の様子</p>	 <p>活動中の様子</p>
<p>アクティビティ名「魔法の鏡」</p>		
<p>活動内容について</p> <p>手をつなぐ要領で輪を持って内向きの円になり（感染症対策）、1か所だけフラフープを握り、そのフープを全員がくぐり抜けて、元の内向きの円を作るアクティビティ</p>		
<p>活動のねらいについて</p> <p><input type="checkbox"/> アイデアを出し合う。 <input type="checkbox"/> 合意形成の仕方について考える。</p>		
<p>活動の様子</p> <p>20分程度失敗を繰り返すが、全員チャレンジする気持ちを持って取り組んでいた。偶然、うまくいきそうになった場面で、「はじめにこっちから」という言葉が見られた。その言葉を発端に、様々な意見が出るようになり、見事クリアすることができた。一つの言葉から、分析的な言葉があふれた結果である。（画13,14）</p>	 <p>画13. 序盤の失敗の様子</p>	 <p>画14. 成功直前の様子</p>

○アンケート結果及び考察について



<p>アンケート結果</p>	
<p>事前アンケートより</p>	
<p>Q. うまくいかないとき、イライラする方である。</p>	 <p>■ する □ しない □ わからない</p>

オンライン事後アンケート	
Q. Jamboard が面白かった人？	<p>■ はい □ いいえ</p>
Q. リアルとオンラインどっちがいい？	<p>■ リアル □ オンライン</p>
Q. また、AFPY をやってみたい人？	<p>■ はい □ いいえ</p>
アクティビティ後の感想等について	
並び替えの邪魔とかあったが、楽しかった。	
「(付箋を) 移動させる人は一人に決めた方がいい」という意見でとてもうまくできた。	
お絵かき失敗したけどすごい！	
すごい簡単にできた。触らなかった。	
リアル事後アンケート	
Q. リアルとオンラインどっちがいい？	<p>■ リアル □ オンライン</p>
Q. また、AFPY をやってみたい人？	<p>■ はい □ いいえ</p>
考察	
<ul style="list-style-type: none"> ・オンラインでは、現実世界の人間関係の影響が少ないように見えた。実際に体験学習に参加するよりも、オンラインによる体験学習の方が参加しやすい生徒もおり、生徒同士で協働する姿も見られた。 ・対面における集団での体験学習では、教員からの身体的な支援や行動の誘導によって主体的に取り組むことができない場面もあった。オンラインでは教員の働きかけが声のみとなり、生徒の自主的な活動を促すことにつながった。 ・体験学習を通してコミュニケーション能力を向上する取組については、オンラインでも十分効果がある。 	

2 おもちゃづくりを中心とした実践（県立H総合支援学校中学部）

<p><目標></p> <p>(オンラインでのやり取りを通して)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オンラインという環境や相手の状況を考えてコミュニケーションを展開する力を養う。 ・言語や表情、身振り等で自分の状況や思いを表現する能力を養う。 <p>(遊びを通して)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目と手の協応動作を通して、自分の身体を基点とした位置、方向、遠近の概念を養う。
<p><実践の概要></p> <p>本校中学部生徒が、「制作が簡単な飛ぶおもちゃ」づくりについてオンラインで分教室中学部生徒にレクチャーし、オンライン上でコミュニケーションを図りながらおもちゃを製作する。</p>

その後、制作したおもちゃを使った遊びを楽しむ。

飛ぶタネ		ブーメラン	
	数か所ハサミを入れ、折り曲げると完成。回転しながら落ちていくことが特徴。		10:1の長方形を交差させ固定すると完成。中心でなくても戻ってくるのがこのブーメランの特徴。

制作したおもちゃ

<授業計画>

- ①おもちゃの作り方について確認するとともに、作り方のレクチャーの仕方について学ぶ。
(本校生徒のみ)
- ②オンラインでのコミュニケーションにおける留意点等を学ぶ。(本校、分教室それぞれにおいて別に実施)
- ③本校生徒のレクチャーのもとで、おもちゃ作りをする。(オンラインでの合同学習)
- ④制作したおもちゃを使って遊んだり、他の生徒と飛距離を比べたりする。
(オンラインでの合同学習)

<学習後の生徒の感想>

【本校生徒】

- ・声と動きで上手に伝えることができた。ただ、少し早口だったかもしれない。
- ・カメラの前で話すのは難しかった。スマートフォンの自撮りの方が話しやすい。
- ・途中からはオンラインのことを気にせず、自然に話げできた。
- ・オンラインでの対決が楽しかった。分教室のみんなと遊べてよかった。

【分教室生徒】

- ・楽しかった。またやりたい。
- ・〇〇さんがよく話げできていて、すごいと思った。
- ・初めは話せなかったが、だんだん話せるようになった。
- ・オンラインの方が話しやすい。

<学習後の教員の評価>

- ・全体的に、オンラインということを通じて過度に意識せず、対面の時とあまり変わらない様子で会話や返事ができていた。
- ・オンラインでも違和感なくコミュニケーションがとれていたように感じた。
- ・制作時に、疑問点を自分から質問することができた生徒もいた。
- ・オンラインだけだとコミュニケーションが難しい生徒もいると思うが、オンラインと対面を組み合わせることで、生徒同士の関係が深まったと思う。

3 本校と分教室の定期的な合同集会を中心とした実践 (県立J総合支援学校中学部)

<目標>

オンラインによる本校生徒との継続的なかわりを通じて、分教室生徒の人間関係を広げるとともに、自ら他者に働きかけたり、自分の思いを表出したりしようとする意欲を育てる。

<実践の概要>

分教室中学部生徒が本校の同学年学級の朝の会等にオンラインで継続的に参加するとともに、本校や他校で実施された以下の集会活動にもオンラインで参加した。

- ①「紙飛行機とばし大会」
- ②「夏休み後集会」
- ③「オンラインボッチャ大会」※県立F総合支援学校分教室との交流
- ④「クイズ大会」

<対象生徒の実態>

- ・知的障害と肢体不自由を併せ有する生徒である。
- ・簡単な会話ができ、その日の天気や給食のメニュー、過去の経験等を自分から話すことはできるが、相手の質問がよく理解できなかつたり、その場で考えて答えたりすることが難しい。そのため、会話することには消極的である。
- ・自宅で動画検索して視聴するなど、タブレット型端末の操作に慣れており意欲的である。

<学習の様子>

- ① 本校の交流学級（同学年）との朝の会に参加する。
 - ・朝の挨拶や健康観察等、決まった流れの中で返事をしたり答えたりすることで、苦手意識を軽減するようにした。また、教員がリードしながら質問に答えたり、一緒に返事をしたりする中で、声の大きさや返事等を模倣できるようにした。
 - ・やり取りの中で、給食のメニュー等の興味のあることを話題にすることで、オンラインの良さや楽しさを感じられるようにした。
- ② オンラインでの交流に慣れる。
 - ・普段、分教室内ではあまり経験できない大きな集団の活動（合同集会）に参加し、オンラインで参加する特別感や楽しさを味わった。



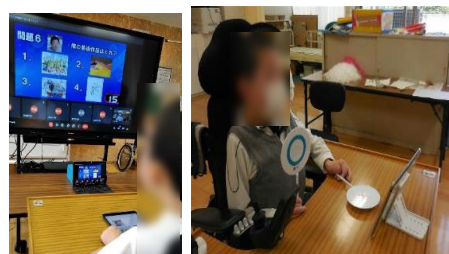
① 「紙飛行機とばし大会」



② 「夏休み後集会」



③ 「オンラインボッチャ大会」



④ 「クイズ大会」

<p><対象生徒の様子></p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手の顔が見えるオンラインでの交流を楽しみにするようになった。会って直接話すだけの時と比べて緊張感が減り、表情に余裕が見られた。 ・回数を重ねることで返事をするに徐々に慣れ、教員の声に合わせて大きな声で返事をするようになった。生徒本人に任せると、声の大きさに気付いて調整したり、自分なりに質問に答えようとしたりするようになった。
<p><学習後の教員の評価></p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々な機会を捉えて継続的にオンラインでの交流を行ったことにより、心理的な安定が図られ、自分から発信しよう、かかわろうとする意欲の向上にもつながったと考えられる。 ・対面だと過度に緊張して話せなくなってしまうことがある本生徒にとって、オンラインでの交流は適度な距離感があり、緊張感の軽減につながったと考えられる。

4 本校と分教室の交流及び共同学習の実践（県立J総合支援学校小学部）

<p><目標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ICT を活用したオンライン授業を通して、本校児童と同じように分教室の児童にもバス遠足の内容を知らせることで心理的な安定を図り、見通しと期待感がもてるようにする。 ・バスの乗り降りや座席の座り方、車内や遠足先での過ごし方など、集団で行動する時に大切なことを感じられるようにする。 	
<p><実践の概要></p> <p>・本校は、隣市に分教室を設置しており、年間20回程度、直接交流で学習を進めている。回数が限られているため、健康診断や運動会、学習発表会などの行事に合わせて直接交流することが多く、日頃の授業で交流することが少ない。事前に分教室の担任が内容や場所などを知らせてはいるが、本校に来て戸惑っている場面も見受けられた。そこで、ICT を活用したオンライン授業によって行事の事前学習も共に学習することで、具体的な見通しをもち、双方の児童と一緒に活動する仲間としての意識を高められるようにしたいと考え、本実践を行った。</p>	
<p><学習の流れ> ※指導案より</p>	
<p>学習活動・内容</p> <p>1. はじめのあいさつ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・はじまりの歌「手と手と手と（1番）」 <p>2. バス遠足についての説明を聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・期日、行先、日程、注意事項 <p>※自立活動の内容</p> <p><u>（心理的な安定②-2・環境の把握④-5）</u></p> <p>3. バス座席表に沿って椅子に座り、移動の練習をする。</p>	<p>●留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> ●椅子を持って集合し、クラスごとに間隔を取りながら座るように促す。 ●歌詞に合わせて楽しく歌う。 ●具体的にイメージできるよう、パワーポイントで提示する。 ●一緒に行動するという意識がもてるよう、キーワードを強調する。 ●椅子（車椅子児童は車椅子）を移動させ、隣や前後の人、前から何番目になるのかな

<ul style="list-style-type: none"> ・バスの乗り降り ・園内の移動の仕方 ・トイレに行きたいとき <p>※自立活動の内容 <u>（人間関係の形成③-4）</u></p> <p>4. 本時の振り返り</p> <p>5. 終わりのあいさつ</p>	<p>どを確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●「バスに乗って」を歌い、バスに乗っているイメージをふくらませる。 ●分教室の児童にも声かけをしたり、座る場所を示したりすることで、一緒に学習している意識がもつことができるようにする。 ●乗り物や動物の写真を掲示し、園内を移動しているイメージをもつことができるようにする。 ●教員が間違った行動のモデルをすることで、決まりを守る大切さに気づくことができるようにする。 ●遠足はみんなと一緒に行動することを再確認できるようにする。 ●時間があれば「遠足で楽しみにしていること」を発表する場をもつ。 ●当日の期待感をもてるようにする。
<p><成果と課題></p>	
<p>《成果》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・分教室の児童も、本校の児童の声を聞きながら事前学習を受けることで、期待感が高まった。 ・分教室の児童の人形を作り、本校の児童と一緒に移動したりバスの座席についたりする様子を見せたことで、分教室の児童も、自分の座席位置やグループの児童を確認することができた。また、本校の児童も、分教室の児童と一緒に活動する見通しをもつことができた。 ・本校、分教室一斉に指導したことで全員が「(グループの児童と) 一緒」というキーワードを確認でき、当日のバスや園内での過ごし方の指導もスムーズにできた。 ・遠足当日は、「一緒に座ろう」「一緒に行こう」など、本校の児童が、教員を介することなく分教室の児童を誘う場面が見られた。 ・事前打合わせを行うことで、分教室の担任も指導の見通しをもちやすかった。 <p>《課題》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本校の授業者が一方向的に伝えることが多く、双方向のやり取りをする時間が少なかった。コミュニケーションの指導を意識したい。 ・接続確認など事前準備に時間をかけても、いざ授業が始まると機器のトラブルがあり、気軽に活用しにくい。 ・分教室も同じ場の設定（バスの座席に見立てて椅子を並べること、園内の動物写真の掲示）をすれば、より理解が深まったかもしれない。双方の児童の目標の共有など、分教室の担任とより綿密に打ち合わせをする必要がある。 	

<指導助言、指導支援について>

《良い点》

- ・リアルタイムに情報を共有することができ、分教室の児童も楽しそうであった。本時ではそのような場面がなかったが、分教室の児童の意見や質問も、授業の中で受けることができるのでよい。分教室の先生にも役割をお願いすると、分教室の児童にとって、より理解しやすい形になると思う。

《課題》

- ・機器のトラブルはつきものと思って授業づくりをするしかない。通信ができなくなってしまう場合も考えて、事前に掲示物やスライドデータを渡しておくなど分教室の担任との連携をしっかりとっておく必要がある。
- ・内容によっては、対面で行った方がよい授業もある。けれども、移動する負担も大きい。内容と効果を考えて、本校と分教室それぞれで担任が指導すべきか、対面で一斉指導すべきか、オンラインで一斉指導すべきか、検討しなければならない。

- ⑤病院に入院している障害の程度が重度の児童生徒等を対象に、タブレット型端末や分身ロボットを活用して、「人間関係の形成」「環境の把握」等に関する指導を実施

【指定校⑦の取組】

県立Ⅰ総合支援学校は、知的障害と肢体不自由を併せ有する児童生徒が多く在籍しており、隣接する病院に入院する児童生徒への訪問教育を行っている。そのため、学校の教員と病院職員（医師、看護師等）の定期的なケース会議を開催して、自立活動の効果的な指導の在り方等に関する意見交換を行うなど、連携の強化に努めている。

しかしながら、コロナ禍により学校と病院の行き来が制限されることとなり、通常の形での訪問教育の実施が困難となった。このような状況にあっても、入院する児童生徒の指導を継続するとともに、オンラインによる指導の可能性を模索するため、オンラインを活用した自立活動の指導の実践に取り組んだ。

また、通学する中学部生徒を対象に、近隣の中学校との交流及び共同学習において、分身ロボットやタブレット型端末を活用した実践にも取り組んだ。

<取組前の準備>

1 校内研修の実施

- ・オンラインツール（Zoom、Google Meet など）の効果的な使い方について
- ・分身ロボット（OriHime）を活用した授業について
- ・オンラインでの指導における教材提示の方法について 等

2 学校と病院でのオンラインケース会議の開催

- ・病院におけるWi-Fiの取扱いに関する共通理解
- ・オンラインでの指導の際の病院での支援体制について 等

<病院に入院する生徒に対する具体的な取組内容>

1 読み聞かせ等を通じたコミュニケーションに関する指導

(オンラインを通じて教員が直接病院の生徒とコミュニケーションをとるケース)

<学習活動>
大型画面に映し出された紙芝居やパネルシアターを見たり、教員の読み聞かせの声を聞いたりして、場面の変化を感じ取る。
<指導上の留意点>
<ul style="list-style-type: none">・視線を向けやすい位置、高さに大型画面をセッティングする。・注視を促すため、紙芝居やパネルシアターはカラフルなものを取扱う。・取扱う物語はできるだけシンプルでわかりやすいものにする。・変化を感じ取りやすいように、教員の読み聞かせは抑揚を付けて行う。・読み聞かせが単調にならないよう、読み聞かせに加え、対象生徒が好む音を効果音として取り入れる。
<指導時の対象生徒の様子>
<ul style="list-style-type: none">・オンラインによるやり取りであっても、場面が変化すると、体を動かしたり目で映像を追ったりするなど行動の変化が見られた。・教員の声が聞こえると動きが止まり、じっと聞き入っている様子が見られた。また、好きな音が聞こえると笑顔が見られた。・10分を超えたあたりから顔がうつむきがちになり、疲れている様子が見られた。
<指導後の教員の評価>
<ul style="list-style-type: none">・オンラインであっても、対象生徒の行動の変化や快の表情を引き出すことができることが分かり、指導の幅が広がったと感じる。・一方で、長時間の注視は難しく、疲れる様子も見られたため、指導時間や授業構成については検討の必要がある。・オンラインだと教員の側が生徒の詳細な様子を把握しづらいということも分かった。通常の対面での授業では、生徒のその場の様子を把握し、柔軟に対応していく面があるが、その部分での行いにくさがある。教員の側から生徒への一方的な働き掛けにならないような工夫が必要であると感じた。・体調管理や生徒の様子の把握の面で、病院職員との一層の連携が必要である。

2 環境の把握や手指の巧緻性の向上を目的とした簡単な工作活動

(オンラインを通じて教員がモデルを提示するケース)

<学習活動>
紙粘土等の素材を使って、素材の感触を味わいながら、玉状、棒状、板状の形を作る。
<指導上の留意点>
<ul style="list-style-type: none">・教員がカメラの前で活動のモデルを示し、大型画面に投影する。・画面上で素材が見えやすいように、手本で示す素材に色を付ける。・大型画面を一定時間注視することが難しい生徒は、個別にタブレット型端末を用意する。

<指導時の対象生徒の様子>

- ・オンラインを通じて活動のモデルを示すことにより、活動への興味・関心が増し、自ら目の前の素材（紙粘土）に手を伸ばす様子が見られた。

<指導後の教員の評価>

- ・活動のモデルを示す際、画面があることでどこに注目すればよいか分かりやすくなるというメリットがある。
- ・オンラインだと生徒の反応が分かりにくい部分があるが、病院職員の方が様子その都度詳しく教えていただいたので助かった。
- ・生徒が教員の存在を感じる事が難しいことから、視覚的な情報や聴覚的な情報をよりわかりやすく伝える工夫が必要である。

<通学する生徒を対象とした具体的な取組内容>

分身ロボットやタブレット型端末を活用した近隣の中学校との交流及び共同学習

<学習活動>

同学年の生徒との人間関係の形成や、コミュニケーション能力の向上を目的とした集会活動に参加し、自分の学校の紹介やPRをしたり、相手校の生徒からの質問に答えたりする。

<指導上の留意点>

- ・集団への所属意識を高めるため、分身ロボット (OriHime) を利用して学習に参加するが、分身ロボットのみだと中学校側から本生徒の様子が見えないため、オンラインツール (Zoom) を併用する。
- ・積極的な発言を促すため、当日の流れや内容について事前指導を行う。

<指導時の対象生徒の様子>

- ・相手校の生徒からの質問に対して、分身ロボットを使って挙手し、積極的に発言したり、グループ活動の中で会話をしたりする姿が見られた。



<指導後の教員の評価>

- ・よりリアルな交流活動を進める上で、分身ロボットとオンラインツールの併用は有効であった。複数のコミュニケーションツールがあることで、相手校の様子も把握しやすいようであった。今後の交流及び共同学習においてもこの方法を継続したい。

(3) オンラインでのやりとりを含めた、外部の専門家や在籍学級担任（他校含む）等との連携の在り方について

- ・ リモートワークツールを活用し、外部専門家からの助言内容を蓄積、保存して関係者間で共有

【指定校⑤の取組】

県立D高等学校では、在籍するすべての生徒が分かりやすい授業の実現に向け、特別支援教育の視点を踏まえた授業実践を推進するとともに、発達障害等のある生徒への通級による指導を実施している。

これまで、特別支援教育に関する校内研修を計画的に実施してきたが、配慮を必要とする生徒の事例検討を年間計画に組み込み、校内の支援体制を一層充実させたいという学校のニーズがあり、オンラインを活用した事例検討の実施の在り方について検討することとした。

1 校内での協議

まず、校内の関係者で、オンラインを活用したケース会議のメリットや、課題として考えられることについて協議した。その結果、以下の内容が挙げられた。

<メリット>

- ・ オンラインであれば、距離を気にすることなく、遠方の外部専門家からも助言を受けることが可能になるのではないかと。
- ・ 専門家に来校してもらって直接生徒の様子を参観していただく場合、基本的に複数日の参観をお願いすることは難しいが、オンラインであればスケジュール調整がしやすくなる。
- ・ 参観だけで生徒の状況を十分に把握していただくことは難しいが、事前に授業の様子等を動画で撮影し、クラウド上にアップして参観いただく形であれば、様々な場面の様子を外部専門家に伝えることが可能となる。

<課題>

- ・ オンラインを活用することから、個人情報保護のための対応が必要となる。そのため、撮影の位置や角度、撮影後の動画編集の必要性等について検討の必要がある。

2 事例検討に向けた準備

上記の協議内容を踏まえてさらに校内で検討し、以下のような流れを進めることを共通理解した。

①事例検討対象生徒の決定

発達障害（ADHD等）のある生徒七人、聴覚障害のある生徒一人を対象とすることを決定

②対象生徒基本情報資料の作成

外部専門家に分かりやすく伝えるため、個別の教育支援計画の記載内容やこれまでの相談記録等の内容を集約して作成

③動画撮影の対象場面の検討、決定

- ・ 管理職、特別支援教育コーディネーター、学級担任が中心となって検討
- ・ 本人及び保護者の承諾

④動画撮影

⑤撮影した動画の編集

- ・動画の長さ
- ・個人情報保護のための処理（顔の部分にモザイクをかけるなど）

⑥クラウド（Microsoft OneDrive）上に基本情報資料と動画をアップロードし、閲覧用 URL を外部専門家に送付するとともに、事例検討会当日までの視聴を依頼

3 オンラインを活用した事例検討会

令和3年度に実施した事例検討会の概要は次のとおりである。

聴覚障害関係：令和3年11月16日（火）オンライン

指導助言者 広島国際大学総合リハビリテーション学部 國末和也 教授

内容 対象生徒の実態把握、指導内容及び指導方法に係る協議、助言

発達障害関係：令和3年12月22日（水）オンライン

指導助言者 関西国際大学教育学部 中尾繁樹 教授

内容 対象生徒の実態把握、指導内容及び指導方法に係る協議、助言

以下に、発達障害関係のオンラインを活用した事例検討会の内容の一部を掲載する。

<生徒の実態>
<ul style="list-style-type: none">・広汎性発達障害、ADHD の診断・理解力が高い一方で、何事にも心配しすぎる面がある。・独特の表現や難解な語句の使用があり、他者に自分の意図が伝わりにくい面がある。自分のペースで話すため、会話が成立しづらい。・同学年の生徒とは一定の距離をとっているが、登校時に女子生徒にかなり接近して歩いたり、軽く触れたりするなどの行動が見られたことがある。
<個別指導の内容>
<ul style="list-style-type: none">・ソーシャルスキルトレーニング・ストレスマネジメント・コミュニケーション能力の育成
<協議内容>
<ul style="list-style-type: none">・行動問題の指導に当たって、主治医からは、実際の場面、出来事に基づいて指導することが有効だと助言を受けている。学級担任はその都度機会を捉えて指導しているが、通級による指導においては、実際の出来事から時間が経過していることが多く、また行動問題を中心に上げると、通級による指導が「行動問題について指導される」場になってしまい、本人が通級による指導にネガティブなイメージをもってしまふ懸念があるからである。・本人の実態等を踏まえ、どのような指導内容が必要か、また、どのような点に留意して指導する必要があるか、助言をいただきたい。
<助言内容>
<ul style="list-style-type: none">・自分なりの道徳があるので、その道徳から外れることは許せないということになる。本生徒の場合、能力的にかなり高いので、通級による指導においては、得意な

こと、ずば抜けているところを生かす、さらに伸ばしていくという視点で取り組むとよい。

- ・自らのボディイメージが形成されておらず、かなり不器用である。体の三軸（前後、上下、水平面）ができていない。他者との距離感がつかめないことがソーシャルスキルにも影響している。ソーシャルスキルトレーニングもよいが、体のイメージをつかむための運動や模倣活動を取り入れるとよいのではないか。ボディイメージが形成されてくると人との距離感が分かり、ソーシャルスキルの習得につながる。
- ・視覚的な情報に対する過敏さがあるため、通常の学級においては、座席の位置を前方の端の方にするとうい。
- ・ワーキングメモリーの高さが数的な処理の部分にしか使われていないので、感情抑制や運動の抑制に使われていくとよい。先ほど述べた模倣活動や、手本を見て手順を覚える活動を取り入れると抑制部分が育ち、突発的な行動が少なくなると考えられる。
- ・ストレスマネジメントの視点から、静的弛緩法などの方法も習得できるとよい。
- ・自閉症から精神的なうつ症状が出やすい生徒であるように感じる。覚醒レベルが下がるとその傾向が強くなる。また、他の生徒から疎外されると自分のこだわりが一層強くなったり、フラッシュバックが起きやすくなったりするので、そのようにならないよう留意が必要である。

4 事例検討後の振り返り

事例検討会終了後は、学校において、外部専門家からの助言内容を踏まえて指導内容や指導方法の見直しを行うとともに、外部専門家に、オンラインを活用した事例検討会の在り方について意見聴取を行った。

外部専門家からの意見は以下のとおりである。

- ・単発に終わらせず、継続的に検討の場を設けていくという意味においては、オンラインの活用は有効だと考える。
- ・動画については、あまり長時間のもの（例：1単位時間の授業をそのまま撮影したものなど）は見にくい。検討したいポイントを明確にした短時間の動画を複数準備していただくと有り難い。
- ・動画だと、対象生徒の様子は把握できるが、周囲の環境との関連や他者との関連等が把握しづらい。例えば、複数回の事例検討を行う場合、初回は直接の参観で、2回目以降はオンラインで実施するというのも一つの方法であろう。
- ・個人情報保護の関係で、対象生徒の顔が隠れる形で動画が撮影されているが、実態把握を行う際に「表情」や「口の動き」は重要な要素となる。できれば表情が見える形で撮影していただくと有り難い。

これらの意見を反映し、令和4年度は対面による事例検討会を行い、オンラインを活用した事例検討会をより効果的に行うことができるような方法を検証することとした。

5 対面での事例検討会とオンラインを活用した事例検討会

令和4年度に実施した事例検討会の概要は次のとおりである。

- 聴覚障害関係：第1回 令和4年7月14日（木）対面
 第2回 令和4年12月6日（火）オンライン
 指導助言者 広島国際大学総合リハビリテーション学部 國末和也 教授
 内容 対象生徒の実態把握、指導内容及び指導方法に係る協議、助言
- 発達障害関係：第1回 令和4年10月3日（月）対面
 第2回 令和4年11月21日（月）オンライン
 指導助言者 関西国際大学教育学部 中尾繁樹 教授
 内容 対象生徒の実態把握、指導内容及び指導方法に係る協議、助言

以下に、聴覚障害関係の対面による事例検討会の内容の一部を掲載する。

<p><生徒の実態></p> <ul style="list-style-type: none"> ・両耳軽中等度難聴（補聴器装用、ロジャー使用） ・日常の会話は理解できるが、内容が複雑になると理解できないことがある。 ・自分の考えを言葉にしてうまく説明することができないときがある。 ・正しく聞き取り、情報を頭の中で整理する力が低いため、文章作成が難しい。 ・視覚による情報の整理が難しいため見落としが多い。 ・長文を読むことを嫌がる。 ・集中力が途切れる場面が多く見受けられる。特に体育の除く実技授業では集中力が途切れた場合に立ち歩くことがある。反対に集中しすぎて目が痛くなることもある。
<p><協議内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ・入学時に比べ集中力も高まり文章能力も向上を見せているが、作業量が増えるとミスが増したり、語彙力が増えると間違えて認識したりすることがある。また、助詞や語尾など自分の解釈や推測のもとで認識していることがあるため、今後どう支援するのが効果的と考えられるか、具体的に助言をいただきたい。 ・補聴器を付けたがらず、片耳だけ付けているが、効果的な指導があるのかお聞きしたい。
<p><助言内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ・聴こえについては、ささやき声は聞こえないが会話は聞こえている。授業の様子を見ていると聞き取れており、ロジャーを有効的に使うことが大事である。また、他の生徒とのやり取りの声も入ってくるため本人は疲れられると思われる。 ・難聴者は全般的に語彙力が少ない上、語尾もあいまいに聞いていたり、活用形もあいまいにしていたりすることが多くみられるため、抽象的な発問は理解が難しいと思われる。そのため、視覚情報と聴覚情報をバランスよく提示することが大事である。助詞など細かな指導をする際は自立活動ではしっかりと厳しく指導し、教科学習ではさりげなく訂正するなど、バランスを取ることが求められる。 ・補聴器装用を嫌がる原因に自分の耳に合っているか、一度診てもらうことを勧める。

6 2年間の取組の流れ（聴覚障害関係）

- (1) 外部専門家と1回目のケース検討（オンラインで動画視聴を行い、外部専門家が実態把握をする）

- ・指導の様子を撮影した動画を外部専門家に視聴していただき、実態把握を行ったうえで指導助言を受ける。
- (2) 外部専門家と2回目のケース検討(対面)
- ・集中力が高まり文章能力も向上しているが、作業量が増えるとミスが増したり、語彙力が増えても正しく使うことが難しくなったりすることがある。また、助詞や語尾など自分の解釈や推測のもとで認識していることがある。
 - ・教員の他の生徒とのやり取りの際、声の大きさへの配慮が必要。補聴器が本人に合っているかを確認。難聴者は一般的に語彙力が少なく、語尾や活用形をあいまいに聞いていることが多くみられるため、抽象的な発問は理解が難しい。視覚情報と聴覚情報をバランスよく提示することが大事。助詞などの指導をする際は自立活動ではしっかり指導し、教科学習ではさりげなく訂正するバランスが必要である。
- (3) 外部専門家と3回目のケース検討(オンラインで取組報告を行い、外部専門家から指導助言)
- ・困ったときの相談体制と就労に向けての情報提供が必要である。
 - ・聴こえが安定すると集中できるため精神的に落ち着くなど良い影響がでている。
 - ・語彙力が実際にどの程度向上したか、1年次の作文と3年次の作文を比較することは客観的な評価となる。

<成果>

- ・生徒の聴こえの状況から補聴器の使い分けなど、専門的なアドバイスを得たことで、教員の専門性が向上し、生徒自身も補聴器装用の必要性を理解することができた。自己理解が深まったことで、苦手なことを再認識し、必要に応じて周囲に支援を依頼しながら、集中して前向きに取り組む姿勢が見られるようになった。
- ・語彙力が向上し、表現力が豊かになり、自分の意見を表出することができるようになった。

7 2年間の取組の流れ(発達障害関係)

- (1) 外部専門家と1回目のケース検討(オンラインで動画視聴を行い、外部専門家から指導助言)
- ・体のイメージをつかむための運動や模倣活動を取り入れるとよい。ボディイメージが形成されてくると人との距離感が分かり、ソーシャルスキルの習得につながる。
 - ・視覚的な情報に対する過敏さがあるため、通常の学級においては、座席の位置を前方の端の方にするとうい。
 - ・ストレスマネジメントの視点から、静的弛緩法などの方法も習得できるとよい。
- (2) 外部専門家と2回目のケース検討(対面)
- ・距離感がつかめないのは、触覚の混乱による問題がある。触覚の指導も必要である。
 - ・表情の認知については、「こうしたらこうなる」といった筋道を立てた指導が効果的である。
 - ・ソーシャルスキルについては、本人にどのような行動をすべきか考えさせることが大切である。
- (3) 外部専門家と3回目のケース検討(オンラインで取組報告を行い、外部専門家から指導助言)
- ・ラジオ体操での背面の動き、ねじる動き、捻転等、一つひとつの動きを確実にすること。

手の振り方も左右アンバランスなので注意する。(動画より)

- ・社会的スキル、対人スキル、場に応じた行動について、T.P.O.を教える。一つずつの場面に応じて、パターン化して教え、それを定着させていく。

<成果>

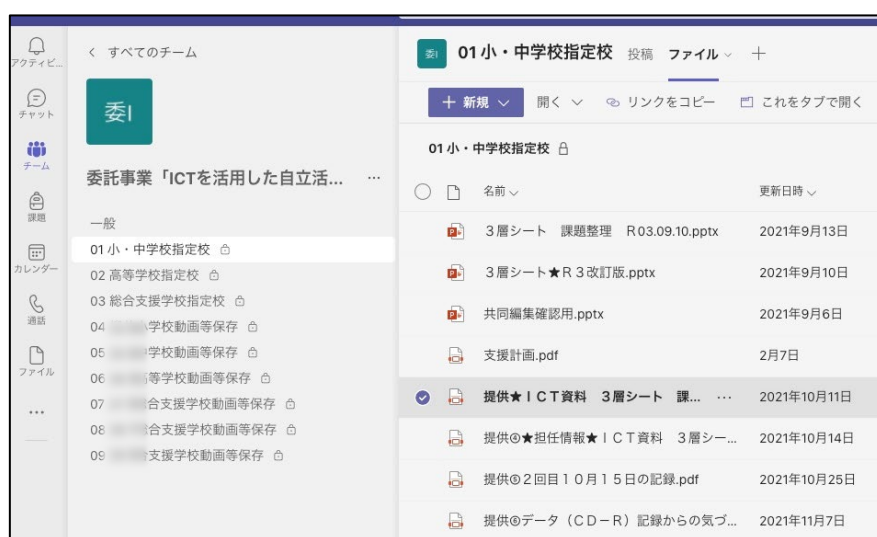
- ・通級による指導については、オンラインを活用することで、「助言」→「実践」→「振り返り」→「助言」のサイクルができ、担当教員は見通しと自信をもって生徒の実態に応じた指導を進めることができた。
- ・保護者と指導・支援の方向性について共通理解するための手助けとなった。
- ・校内において専門家の指導・助言を共有することで、支援が必要な生徒の対応について共通理解が進んだ。

【全指定校の取組】

各指定校においては、指導の経過や、地域コーディネーターや大学教員等の外部専門家と情報共有したり、助言を受けたりした内容等をリモートワークツールを活用して時系列で保存し、校内での振り返り等や事例検討の際に活用した。

クラウド上に関係データが集約されるため、本事業におけるデータベースとしての役割を果たすとともに、関係者間で情報共有を密に行うことができた。

また、チャットやオンライン等の機能を用いて、各指定校間や外部専門家との情報交換を行うこともでき、関係者間の連携強化に非常に役立った。



リモートワークツールの画面

本県でのオンラインによる自立活動の指導の実践は初めての試みであるが、2年間の取組を通じて以下の知見を得ることができた。

<オンラインでのやりとりを含めた、児童生徒の実態把握(障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、生活や学習環境など)の在り方>

- ・事前に撮影した動画や「具体的指導のための3層マップ」を活用したケース会議を実施した。必要な情報を可視化し、参加者全員で閲覧することで、対象児童生徒の実態や目標等を確実に共有することができた。
- ・オンライン上で、プレゼンテーション用ソフトやホワイトボード等を活用し、協議の経過

や共通理解事項等を可視化しながら実態把握を進めることは、担当教員の理解度を高める上で有効であった。

- ・対象児童生徒の実態や目標等をクラウド上に時系列で保存し、常に確認できるようにしたことにより、指導の際に常に実態や目標を意識して進めることができた。
- ・コロナ禍での感染不安や移動が負担である児童生徒にとって、オンラインを活用することで相談支援を安全に実施することができた。
- ・指導の様子や助言の内容等をレコーディングすることで、その内容を後で振り返りのために活用したり、指導記録として蓄積したりすることができた。

＜特別支援学校及び特別支援学級における自立活動や、通級による指導について、オンラインによる実施を含めた指導（対面とオンラインを組み合わせた指導）及び評価の在り方＞

- ・オンラインは場所が離れていてもリアルタイムで情報を共有することができ、意見や質問ができることで主体的な活動につながりやすく、遠い距離を移動する必要もないので負担軽減もできる。
- ・オンラインはマスクを身に着けずに話をするため、相手の表情を意識したやり取りを行うことができる。
- ・アバターを活用することで、対人面に不安がある児童生徒も顔を出さずに安心してやり取りをすることができる。
- ・対人面に不安はあるがオンラインで顔を出すことができる児童生徒にとって、オンラインを活用することで緊張がほぐれ、対面では言えない悩みなどを打ち明けるなど、教育相談にも活用することができる。
- ・インターネットでの検索等、必要な情報を短時間で得ることができるので、児童生徒の興味・関心を即時に共有することができる。
- ・学習の記録が残るので、児童生徒が課題を最後までやりきったという達成感を味わったり、教員の評価のツールになったりする。
- ・書字の苦手な児童生徒が、書字の代わりにキーボードでの出力を行うことで、字を書くことへのストレスを減らし、安心して学習に取り組むことができる。
- ・普段なかなか意見が言えない児童生徒もICTを使用することで、自分自身の考えを整理したり、話し合いの中での手がかかり（検索等）として活用したりすることができる。
- ・不登校の児童生徒への支援として、オンラインを活用することは有効で、画面越しに他の児童と会話することで、帰属感をもち続けることができ、学習の遅れを防ぐための学習機会の保障としての役割を果たすことができる。オンラインを活用することで、学校行事への参加も可能である。
- ・本校、分教室をオンラインでの一斉指導により、互いに「対面で一緒に活動する」ことへの期待を高めることができる。授業場所とは離れたところにおいても、リアルタイムで一緒に活動する内容を確認し、「誰とどんな活動を行うのか」の見通しを互いにもつことができる。
- ・アプリを使用し、協働する場面を設定することで、オンラインにおいても集団での体験活動を経験することができる。
- ・重度の肢体不自由のある児童生徒に対して、画面録画で取組を記録、蓄積をすることで、その場では確認できない教員の言葉かけへの細かな反応や表情の変化を再確認し、客観的な評価をすることができる。
- ・リモートワークツールを活用し、日常的にメッセージのやり取りをする、ファイルの共有をする、必要に応じてオンラインを実施することなどにより、教員が安心して指導を行う

環境を作ることができる。

- ・対面授業と違い、オンラインの画面であれば教員と向き合い集中できる児童生徒もいることや、画面と向き合うことで注視につながりやすい。

<オンラインでのやりとりを含めた、外部の専門家や在籍学級担任（他校含む）等との連携の在り方>

- ・ZoomやTeamsなどのリモートワークツールを活用し、外部専門家と遠方でも連絡が取れるシステムが構築されると、専門的な助言を得ることができるため、教員（通級担当者・通常の学級の担任）の専門性が向上し、より質の高い指導・支援を行うことができる。
- ・オンラインを活用して助言を得ることで授業のPDCAサイクルを効果的に回すことができ、見通しをもって指導を進めることができる。
- ・授業の様子を動画等で記録し、クラウド上にアップロードして情報共有する際には、個人情報保護の観点から児童生徒の顔が見えないように加工する必要があるが、細かな生徒の実態が伝わらない、外部専門家の見たい視点と動画撮影者の意図が合わない（手元が見たい、身体のバランスが見たい等）ことがあるため、1回目は対面での実態把握を行い、2回目以降はオンラインの形をとることが望ましい。
- ・外部専門家から得た知見やICTを活用した記録を校内において共有することで、支援を必要としている児童生徒への理解を深めることができる。

<成果物>

- ・オンラインによる自立活動の指導の実施に係るチェックリスト（別添資料①）
- ・自立活動の指導の充実をめざしたICT活用
～対面による指導・遠隔による指導のベストミックス～（別添資料②）

5. 問合せ先

組織名：山口県教育委員会

担当部署：山口県教育庁特別支援教育推進室